

## 非漢字圏留学生に対する日本語予備教育一年課程の誕生

——1943年度国際学友会日本語学校開校に至るプロセス——

かわじ ゆか  
河路 由佳

(発表要旨)

日本の高等教育機関への進学を目的とする留学生のための進学準備のための日本語予備教育の1年課程は今日では一般的だが、1930年代はじめには、非漢字圏留学生には無理だと考えられていた。中国以外の世界各地からの留学生の保護善導を目的として設立された国際学友会においても、当初は、会館止宿生へのサービスタとして日常会話の学習を支援する目的で午前2時間の日本語授業が行なわれるにすぎなかった。それが、1938年度からは日本語の専門家を迎えてより本格的にとりくまれることとなり、効率的な学習をめざした教科書編纂がはじまり、1940年度から1942年度にかけて教科書の発行、校舎の移転など条件を整え、1年課程の各種学校として文部省の認可を受けて1943年度には国際学友会日本語学校の開校となった。留学生の必要に応えたいという現場の熱意が、当時の留学生教育政策や日本語普及政策を追い風として、短期間でめざましい成果をもたらしたといえる。敗戦により、1945年12月には閉校を余儀なくされたが、ここで実現した非漢字圏留学生への一年過程は、戦後の日本語教育にひきつがれていく。

本発表では、その展開の概略と教科書を紹介し、この教科書のうち、特に国際学友会(1941-1943)『日本語教科書巻1-5』と、戦後1970年代まで国の内外で広く使われた国際学友会日本語学校(1957-1958)『日本語読本1-4』とを比較し、敗戦前後の日本語教育における連続性と非連続性について考察する。

### 1. はじめに

- \* 日本語予備教育・・・日本の高等教育機関で学習活動をするのできる日本語力の習得を目標とする学習者にその目的を達成させるための日本語教育
- \* (非漢字圏出身の) 留学生にとって、日本語予備教育に必要な学習期間はどのくらいだろうか。
  - (1) 日本語能力試験の1級・・・財団法人日本国際教育協会による認定基準によると、  
(日本語を900時間程度学習したレベル)
  - (2) 斎藤次郎編(1990)『一年で社説が読めた-東京外国語大学附属日本語学校の365日』  
→非漢字圏留学生のための1年課程の日本語予備教育機関の歴史を  
さかのぼると、1943年度開校の国際学友会日本語学校にいきつく。

### 2. 国際学友会(1935~1945)の留学生教育としての日本語教育に果たした役割

- 非漢字圏留学生のための日本語教育の実践
  - 1943年度非漢字圏出身留学生対象の日本語予備教育1年課程を持つ日本語学校の開校  
(1945年12月に閉校となるが、1958年度に再び、開校)
- 多国籍の留学生が共に暮らし学ぶ「国際教育」の実践
  - 1936年2月、日本初のインターナショナル・ハウス、国際学友会館を開館
  - 戦後は・・・戦後の留学生教育としての日本語教育の復興を牽引
  - 1962年「外国人のための日本語教育学会」の創立にあたって事務局を担当。  
新しく設立される日本語教育機関へ、人材を供給。

### 3. 問題の所在 と 研究の目的

1. 今日の日本における日本語教育の源をたずねる
2. 「国際文化交流」と「文化侵略」との関係を考察する

\* 「国際交流」のための日本語教育は戦後始まったというのは事実だろうか。(その理念の生まれた背景、本質とその限界は?)

\* 戦後の「国際交流」のための日本語教育は、戦時期の「侵略のための」日本語普及から「生まれ変わったもの」といえるのだろうか。(「国際文化交流」と「文化侵略」との関係は?)

### 4. 発表の背景

本研究会における過去の発表

(ア)1996年10月26日(土)「戦前の国際学友会における日本語教育——松村明氏へのインタビューより」

(イ)1997年2月8日(土)「戦前の国際学友会における日本語教育(2)——辞典編集部と日本語教育部時代の日本語教育を中心に」

\* 河路由佳「戦時体制下における『国際文化事業』としての日本語教育の展開——1934-1945年の国際文化振興会と国際学友会——」(2004 博士論文)  
では、国際文化振興会と国際学友会をとりあげた。

\* 河路由佳『非漢字圏出身留学生のための日本語学校の誕生』(港の人)、及び、当時の教科書全7点の復刻、『国際学友会「日本語教科書(全七冊)」[1940-1943]』年内出版予定

\* 当時の日本留学経験者への聴き取り調査を継続中

### 5. 戦時体制下の国際学友会(1935-1945)の日本語教育の展開

(表1)

(作成:河路)

年月	一般事項	日本語教育関連事項
1935年12月	国際学友会設立(所管・外務省)。	
1936年2月	西大久保に、国際学友会館、開館。	会館寄宿生のために、午前中2時間の日本語教室が始まる。日本語担当者は4名。
1938年度		主任教授として服部四郎が着任し、日本語教員は5名に。授業が午前3時間に増え、10月より基礎科目の授業が始まる。会館外からの日本語授業通学生も増加する。
1939年度		授業は一日4-5時間に。三学期制、日本語能力別クラス編成が行われる。岡本千万太郎、主任教授として着任、教科書編纂に着手。このころより日本語教育部という名称が使われ、学籍簿が整えられる。

1940年度	12月、「財団法人 国際学友会」となる。情報局に移管される。	国際学友会『日本語教科書 基礎編』(1940年12月)・同『日本語教科書 巻1』(1941年1月)刊行。
1941年度		11月、日タイ辞典編纂のため、辞典編纂部が発足。『重要五百漢字とその熟字』(1941年7月)『日本語教科書巻2』(1941年9月)・『同 巻3』(1942年3月)刊行。
1942年度	6月、目黒の元アメリカンスクールに移転。11月、大東亜省設置。所管が、大東亜省との共管に変わる。	『日本語教科書 巻4』(1942年11月)『日本語教科書 巻5』(1943年4月)刊行。 校舎移転後、教室数等、設備が充実する。
1943年度	7月より南方特別留学生104名入学。	4月、国際学友会日本語学校、開校。南方特別留学生の受け入れへの対応として教員数が増大する。
1944年度	南方特別留学生101名入学。	
1945年度	10月、渋谷区に移転。 46年1月、中国留学生関係団体解散のため、事務処理および関係留学生の世話が国際学友会に移転される。	12月、国際学友会日本語学校、閉校。

(表2) 国際学友会日本語教室学籍簿より出身地域別入学者数(国・地域名は学籍簿のまま)

	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	計
タイ(シヤム)	1	15	30	20	26	7	12	111
アメリカ	2	3	2	1	-	-	-	8
イギリス	-	2	-	-	-	-	-	2
ドイツ	-	4	1	1	2	1	-	9
イタリー	-	-	-	2	-	-	-	2
ハンガリー	-	-	-	1	-	-	-	1
白系ロシア	-	-	-	-	1	-	-	1
ポーランド	-	-	-	-	1	-	-	1
ボリビヤ	-	2	-	-	-	-	-	2
ブラジル	-	1	1	-	-	-	-	2
メキシコ	-	2	1	-	-	-	-	3
ウルグアイ	-	-	1	-	-	-	-	1
安南(ベトナム)	-	-	-	3	4	11	-	18
フィリピン	1	3	2	-	1	27	24	58
ビルマ	1	3	-	-	-	17	30	51
インド	-	4	3	3	-	-	-	10
インドネシア	-	1	3	-	1	-	-	5

日本	-	-	2	2	3	-	-	7
マライ	-	-	-	-	-	8	4	12
スマトラ	-	-	-	-	-	7	9	16
ジャワ	-	-	-	-	-	24	20	44
セレベス	-	-	-	-	-	11	-	11
南ボルネオ	-	-	-	-	-	7	-	7
セラム	-	-	-	-	-	3	-	3
北ボルネオ	-	-	-	-	-	-	2	2
不明	-	-	1	-	1	1	-	3
計	5	40	47	33	40	124	101	390

\* 1936年度にはアフガニスタンからの招致学生を6名、1937年度にはドイツからの交換学生3名、日系米人、メキシコ、ブラジルから招致学生をそれぞれ1名ずつ受け入れ。

## 6. 国際学友会の10年(1935-1945)の時代区分について

### (1) 所管官庁の推移に注目

- 1) 外務省時代(1935年12月—1940年12月)
- 2) 情報局時代(1940年12月—1942年11月)
- 3) 大東亜省時代(1942年11月—1945年8月)

### (2) 日本語教育の位置づけに注目

- 1) 国際学友会館の日本語教室時代(1936年2月—1939年3月)
- 2) 国際学友会の日本語教育部時代(1939年4月—1943年3月)
- 3) 国際学友会日本語学校時代(1943年4月—1945年12月)

## 7. 国際学友会日本語学校の設立を実現させたもの

教育体制の整備と教育実績・・・

国際学友会(1940-1943)『日本語教科書 基礎編・巻1-5』の完成  
設備の整備・・・

中目黒の元アメリカン・スクールへの移転(1942年6月)

## 8. この時期の国際学友会による日本語教科書

- 『日本語教科書 基礎編』 1940年12月
- 『日本語教科書 巻一』 1941年1月
- 『日本語教科書 巻二』 1941年9月
- 『日本語教科書 巻三』 1942年3月
- 『日本語教科書 巻四』 1942年11月
- 『日本語教科書 巻五』 1943年4月
- 『重要五百漢字とその熟字』 1941年7月

9. 国際学友会(1940-1945)『日本語教科書 巻1-5』の特色

\*場面シラバス(+技能シラバス)・・・編者による書き下ろし教材

\*話題シラバス

- (1) 日本・日本文化を紹介するもの
- (2) 日本語の文芸や芸能を紹介するもの
- (3) 留学生の生活を描くもの
- (4) 「国際教育」の理念が託されたもの
- (5) 「大東亜戦争」を反映する文章の含まれるもの

\* (5)は、1942年11月に「国際学友会の所管が大東亜省になり、1942年8月に「日本語教育ならびに日本語普及に関する諸方策は陸海軍の要求に基づき文部省においてこれを企画立案すること」が閣議決定された時期にその編集の時期がかかったものに現れてくる。

10. 国際学友会(1941-1943)『日本語教科書 巻1-5』の

国際学友会日本語学校(1957-1958)『日本語読本巻1-4』への影響

『日本語教科書』			戦後の『日本語読本』			所見
巻	課	題	巻	課	題	
1	1	アサ○	1	3	うちから がっこうまで	朝6時に起き、電車にのって学校に着くまでを説明する展開が同じで、文章も類似している。
1	9	ヒナまつり○	1	23	ひなまつり	文章の一部が同じ。文章の展開も類似。
1	12	コヒノボリ○	1	24	こいのぼり	文章の一部が同じ。文章の展開も類似。
1	14	浦島太郎	2	2	浦島太郎	全く同じ
1	15	東京駅で○	1	36	大きな駅	駅のアナウンス・赤帽などの描写が類似。
1	19	手紙—先生へ○	1	42	手紙	留学生が日本の近況を伝える手紙。相手が先生から両親になっているが、構想、内容が共通。
1	20	日記○	2	12	キャンプ生活— 日記	三保が山中湖に変わっているが留学生の夏季日本語授業の実録という設定が同じ。文体も類似。
1	21	羽衣	2	5	羽衣	全く同じ
2	4	電話○	1	32	電話	固有名詞が違うだけで、内容はほぼ同じ
2	8	お客様と紹介状 ○	2	4	ほうもん	留学生が織物工場主を訪ね実習の交渉をする。個人名が違うだけで内容はほとんど同じ。
2	10	お月見○	2		お月見	文章の大半が同じ
2	12	火事○	1	40	火事	近所で火事があった体験文という設定が同じ。文章も一部が同じ。
2	13	郵便○	2	10	送金	留学生が祖国の父からの送金を受け取る話。個人名や金額等が異なるが内容はほぼ同じ。
2	16	諺(格言)○	4	10	ことわざ	入れ替わりがあるが、形式が同じ。
2	19	日本ノ正月○	3	19	お正月	ほとんど同じ。
2	20	入学試験○	3	28	入学試験	登場人物の名前にいたるまで設定は同じ。入学試験の内容などが新しくなっている。

2	22	太陽	3	18	太陽	「少年少女科学理化学篇」より。
3	1	友達○	3	20	友達	ほとんど同じ
3	2	くもの糸	3	15	くもの糸	芥川龍之介の作品
3	5	良寛	3	5	良寛さま	相馬御風の作品
3	8	やしの実	3	23	やしの実	島崎藤村の作品
3	10	身体に関する言 い回し	4	4	身体に関する言 い回し	芳賀矢一の文章
3	15	小泉八雲○	3	11	小泉八雲	戯曲から散文になり、強調点が異なるが同じ人物の伝記がほぼ同じ情報で構成されている。
3	16	送別会○	3	30	送別会	固有名詞や内容の一部が変わっているもののほとんど同じ。
4	6	みかん	4	16	みかん	芥川龍之介の作品
4	8	落葉松	4	6	落葉松	北原白秋の作品
4	4	安寿と厨子王	4	8	山椒太夫	森鷗外の作品

以上 27 編のうち、17 編が編者による書き下ろし。(書き下ろし本文の全 33 編のうちの半分)  
先に示した話題別の分類に即して言うと、継承されたのは特に (1) (3) (4) である。

→ 国際学友会 (1941-1943) 『日本語教科書 巻 1 - 5』から国際学友会日本語学校 (1957-1958) 『日本語読本 1 - 4』への改変の例 (別紙資料参照)

## 11. まとめ

(1) 非漢字圏出身留学生のための日本語予備教育 1 年課程は、1943 年度の国際学友会日本語学校の開校が最初の実現で、戦時体制下の「国際教育」、「日本語普及」、「留学生教育」の推進に後押しされて実現した。

(2) 国際学友会 (1940-1943) 『日本語教科書』は国際学友会日本語学校 (1957-1958) 『日本語読本 1 - 4』の原型である。

→ 「国際文化交流」のための日本語教育という理念は、戦後新たに生み出されたり発生したりしたものではない。

→ 1930 年代の「国際文化事業」における日本語教育の理念は、その限界が議論されたり、新たな理念が模索されたりする過程を経ないまま、暗黙のうちに継承され、その上に戦後の日本語教育の復興があった。